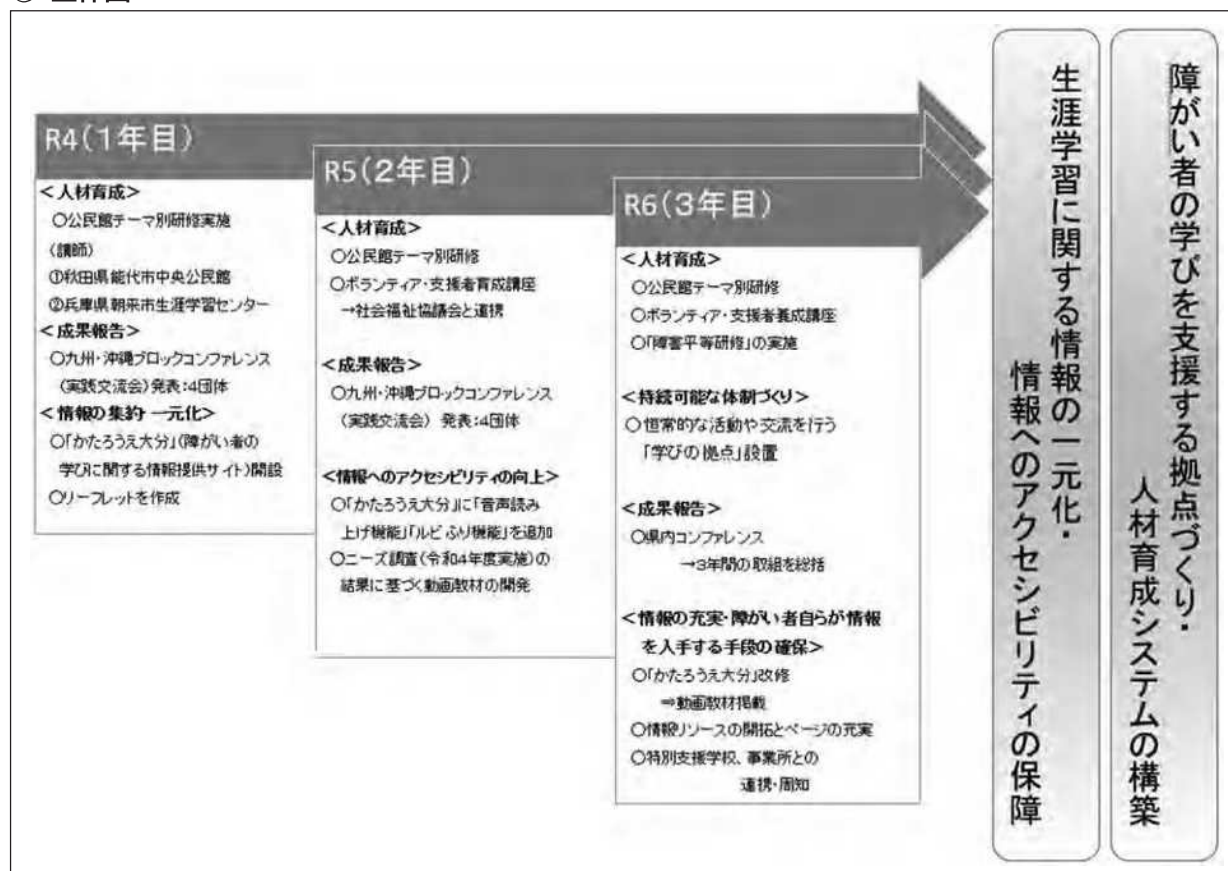


4. 普及・啓発

(1) 概要（令和4～6年度）

① 全体図



② 目的

- ア.障がい者の生涯学習に関する情報発信
- イ.人材育成（指導者・支援者の養成）
- ウ.広域コンファレンスの開催による事業の普及
- エ.学びの場や機会の拡充

③ 取組

- ア.障がい者の生涯学習に関する情報発信（詳細はP39）
 - ⇒・専用ウェブサイト「かたろうえ大分」運営
 - ・リーフレット発行
- イ.人材育成(指導者・支援者の養成)（詳細はP35、36）
 - ⇒・公民館職員対象研修
 - ・社会教育施設（公民館等）講座支援者研修
 - ・障害平等研修
- ウ.広域コンファレンスの開催による事業の普及（詳細はP40、41）
- エ.学びの場や機会の拡充（詳細はP37、38）
 - ⇒おおいたユニバーサルカレッジの開講

④ 成果と課題（今後の展望も含めて）

「かたろうえ大分」を開設し、ユニバーサル機能も追加したことで、情報へのアクセシビリティを保障することが一定程度できている。しかし、そもそも視覚障がいがある方がスマートフォンやパソコンを利用されるのか、ユニバーサル機能の効果はあるのかということについては測定することが難しく、そのような声も聞こえてきていないのが現状である。

また、研修は力を入れて行ってきたため、障がい者の生涯学習という概念や重要性は少しずつ定着しつつあるが、体系的な連続講座を実施する方が、障がい理解も深まり実践的なスキルアップが見込めると考えられるため、方法や内容については改善の余地がある。

また、コンファレンスは開催場所や時期、内容を見直して参加者を増やしたい。

学びの拠点として「おおいたユニバーサルカレッジ」を開講できたが、まだ認知度も低く受講者も少ないので、特別支援学校出前講座等を通じてPRし、拡充を図っていききたい。

(2) 研修

① はじめに

令和4年度に実施した社会教育施設対象の調査では、「障害者の学び支援」に関わった経験が「ある」と答えた施設は25.9%と、「ない」の71.0%の約3分の1という結果であった。その理由としては、「障がいの有無にかかわらず指導可能な講師や指導者の確保、育成ができていない」(51.3%)、「施設・設備の整備が不十分」(41.7%)が多く挙げられた。また、ボランティア等を対象とした障がい特性の理解等を促すための事前研修等についても「実施したことがある」という施設は14.3%と、障がいがある方を対象にした講座を実施する素地が整っていないという現状が明らかになった。

そこで、①社会教育関係者が、障がいや障がいがある方、合理的配慮等について理解する。②先進的な取組をしている団体や個人を講師として招き、意欲を喚起するとともに具体的なノウハウを学ぶ の2点を目的に研修を実施した。

② 令和4年度の実践

ア. 第1回公民館テーマ別研修 (7/16)

【内容】

- ・講義「大分県における障がい者の学びの現状と課題」
(講師:県身体障害者福祉センター副所長 吉川広明氏)
- ・講義「秋田県 障がい者の生涯学習支援モデル事業」
(講師:秋田県能代市中央公民館事業係長 佐藤邦彦氏)

【成果】

- 実践の積み重ねによって得られたノウハウやポイント等について講演や発表を行っていただいたため、受講者の満足度が高かった
- コロナ禍で参加を控える方が多かった。オンライン配信、オンデマンド配信を行い、広く研修の機会を提供するべきだった。

イ. 第2回公民館テーマ別研修 (9/16)

【内容】

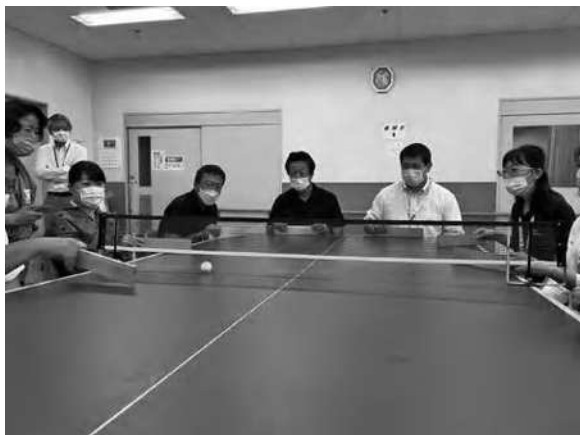
- ・体験「ボッチャ・フライングディスク・ドローン体験・卓球バレー」
(協力:県身体障害者福祉センターが場所提供、講師紹介)
- ・講義「公民館が行う知的障がい者支援」
(講師 NPO法人ぶろじゅくとPlus 相談支援専門員 足立志津子氏) オンラインで実施
- ・ワークショップ「公民館講座を作ってみよう」

【成果】

- 「卓球バレーはすべての障がい者が参加できるスポーツと思うので取り組みたい。」といった発見や前向きな感想が多かった。
- ドローン操作は昼休み少し実施しただけだったが、参加者は夢中で楽しんでいた。ドローンサッカーの将来性を強く感じた。

- グループ協議を通して「今日帰って早速できること」「今年度中に見ようと思ったこと」を考え、発表することにより、講座実施への第一歩となった。

●講演の内容が盛りだくさんで、時間が足りなかった。



< 卓球バレーは「楽しい」「ぜひ取り入れたい！」 >

③ 令和5年度の実践

ア. モデル事業関係者事前研修(由布市庄内公民館)(7/5)

【内容】

- ・講義「障がいの有無にかかわらず誰もが楽しく活動に参加するには」
(講師 大分大学教職大学院准教授 高橋徹弥氏)
- ・ワークショップ「講座・プログラム運営の実際」

- 実際の講座計画・運営を想定して工夫できる点を考える。*想定講座:「クリスマスリースを作ろう!」

【成果】

- 「障がいとは」「合理的配慮とは」について、各自で考え、新しい気づきを得た
- 事前研修での学びを、実際の講座にどう活かしたのか検証ができていない。



< ワークショップの様子「必要な配慮を考えよう」 >

イ. 第1回公民館テーマ別研修(7/14)

【内容】

- ・報告・演習「やさしい日本語の公民館での活用について」
- ・実践発表「一緒に学ぼう、遊ぼう、みんなの『学び舎』で！」

(千葉県我孫子市湖北地区公民館 館長 太田悟氏)

・シンポジウム

①県内事例紹介

- ＊豊後大野市千歳公民館「ひょうたんカレッジ」
- ＊大分市坂ノ市公民館「ボッチャ教室」

②協議「共生社会の実現に向けた公民館の取組(現状と課題)」

【成果】

- 県内事業を実施主体に「発表」してもらおうのではなく、研修担当者が取材し、「好事例として紹介」「研修の教材として提示」という試みは、事業者の負担を軽減し、取組のすばらしさを客観的に伝えられるメリットがある。
- 「やさしい日本語」は障がいがある方にとっても有効で、公民館職員として身につけたいスキルであることが提示できた。
- 先進地の実践例と館長の熱量は参加者に大いに刺激となり、意欲を喚起した。
- シンポジウムにおいて、参加者による積極的発言を促す仕組みづくりが重要である。

④ 令和6年度の取組

ア. 社会教育施設(公民館等) 講座支援者研修

(ア)日田市A O S E (アオーゼ) (5/23)

(イ)中津市生涯学習センターまなびん館 (6/24)

【内容】

- ・講義「障がいの有無にかかわらず誰もが楽しく活動に参加するには」

(講師 大分大学教職大学院准教授 高橋徹弥氏)

- ・ワークショップ「講座・プログラム運営の実践」

- 実際の講座計画・運営を想定して工夫できる点を考える。＊想定講座：「カレーライスを作ろう！」

【成果】

- 前年度の高橋先生の研修がこれから講座をはじめようとするスタッフや支援者の不安を払拭してくれるような内容で好評であったため、今年度も引き続きお願いした。参加者からは「配慮の視点が広がり、有意義だった。」「実際に事業として行う場合も、多くの意見を共有して進めることが重要だと感じた。」等の意見があった。
- 講座を実施するにあたり必要な、事前準備と当日の運営の工夫について、具体的にイメージすることができた。

イ. 障害平等研修(DET)(7/19)

【内容】

- ・グループワーク(4人1組)

目標：「私は、障がい者を含めたすべての人が、より社会参加しやすくするための、行動をする」

講師：一般社団法人Diversity&Inclusion理事

認定ファシリテーター 石川明代氏 他6名

【成果】

- 講義形式ではなく、障がい当事者であるファシリテーターの導きに沿って、参加者各自が徹底的に考え、語り合う形式であり、「自分にかかっていたと思われるバイアスが溶けた」「身近なところから行動にうつすとともに、障がいのある方の望みを学び、聞く機会を作っていきたい。」等、研修後には参加者の変容が見られた。
- 参加者が少なかった(30名)。来年度以降も県内各地で実施し、一人でも多くの方に参加してもらいたい。



< 考えたことをふせんに書き、対話で深めていく >

⑤ 今後の展望

講座を実施する際、参加者の引率者である障がい福祉関連施設の職員や、メンター(特別支援学校の教職員経験者)に頼っている部分も大きいのが現状である。

社会教育施設において取組を普及・進化させていくためには、指導者・支援者の養成・確保が不可欠なので、今後も研修を継続して実施していくことが重要である。

その内容としては、障がいがある方の生涯学習の意義や必要性を学ぶ学術的なものから、より実践的なスキルアップを図るものまで幅広い。県内のモデル公民館事業に携わった職員による講話や助言も効果的である。また、実際に講座を見て学ぶ「視察・支援体験」により、取り組みへの抵抗感が払拭されたという声も多い。研修の内容を充実していくことが求められる。

(3) おおいたユニバーサルカレッジ

① はじめに

令和4年度に事業を開始し、公民館や青少年の家等での講座を実施してきたが、おおむね受講者やその保護者、支援者からは好評で「こういう場がもっとあると良い」「次はいつあるのか」という声を多く聞いた。

そこで、「学びの拠点」＝定期的に集い、学べる場をつくろうと、令和5年度より計画を立てた。

② 事業をはじめるとあたり

A. 先進事例視察

令和5年6月20日に、和歌山県紀の川市にある「麦の郷 ゆめ・やりたいこと実現センター」の「夕刻のたまり場」「やりたいこと講座」を視察した。平成30年より、古民家を活用して毎週水曜日に「たまり場」を運営しながら、利用者の「やってみたい」という声をもとに講座をつくってきた。

- ①夕刻のたまりば（毎週水曜日、15～19時）
参加者：平均13名/回が思い思いに過ごす。
話したり、食べたり、ウクレレを弾いたり……
- ②やりたいこと講座 興味のあることについて、地元の講師を発掘・招へいして実施

参加者が心からリラックスして思い思いに楽しむ姿、支援者・ボランティアとざっくばらんに話す姿に感銘を受け、ぜひ大分県でもこのような場を作りたいと考えた。

I. 事業のデザイン、実施主体（委託先）選定

【目的及び概要】

- ・障がいがある方が特別支援学校等を卒業したあと、仲間と交流したり学んだりできる恒常的・継続的な「居場所」兼「学びの場」を提供するための生涯学習拠点として「おおいたユニバーサルカレッジ」（以下「OUC」）を開設する。
- ・OUCは、主に障がいがある方を対象として、拠点施設での交流や学びに関するプログラムを実施するとともに、県内の公民館等における出前講座を実施することで障がい者の生涯学習の普及とともに学習支援に携わる人材発掘・育成を図る。

【OUCの基本方針】

- ①障がいがある方に「居場所」や「学びの機会」を提供する。必要に応じて相談等の支援を行う。
- ②特別支援学校や大学、企業、行政、団体、ボランティア等と幅広く連携・協働する。
- ③市町村の公民館等社会教育施設に対して障がいがある方が安心して参加できる講座等のプログラムを提案・協働して実践する。
- ④①～③の実践を通じて、講師やボランティア人材の

発掘・育成を図る。

- ⑤障がいがある方の意見を尊重し、事業の成果について検証・改善を行う。

【実施場所】県立さくらの杜高等支援学校

- ・大分駅から徒歩10分とアクセスが良く、駐車スペースもある。
- ・グラウンドで運動もできる。
- ・特別支援学校内にあるため、生徒が卒業した後も来やすい。

【実施日時】

- ①毎月第1土曜日 10:00～14:00
毎月第2～第5火曜日 16:30～18:00（基本）
- ②市町村の公民館等社会教育施設での講座は先方と協議の上実施日時を決定

【事業実施形態】

「ヨカたの（任意団体）」に委託する。
（理由）「ヨカたの」は大分県内の団体であり、主なスタッフは全員特別支援学校教員経験者である。また、スポーツ・芸術・相談対応等の7事業を展開し、その功績により令和2年度には文部科学大臣表彰を受賞しており、本事業に必要な全ての条件を満たす団体であることから、本団体に委託することが合理的であると判断した。

③ 取組の実際

【広報】

- ・受講者募集チラシを作成し、県内特別支援学校全生徒に配布。毎月末に「OUCだより」（巻末資料P57）を発行し、取組の周知を図った。
- ・インスタグラムを開設し、こまめに更新している。



📱 インスタはこちらから

- ・ロゴマークを作成（鶴崎工業高等学校 佐藤大作先生作）



※無断転載を禁じます

【講座運営】

	日	内 容	受講者数
6月	1 土	開講式	6
	11 火	アジサイを作ろう	5
	18 火	好きな歌を紹介しよう①	3
	25 火	好きな歌を紹介しよう②	3
7月	9 火	折り紙を使って①	3
	13 土	コーヒーを淹れよう	4
	16 火	好きな歌を紹介しよう③	3
	23 火	かき氷を作ろう	3
	30 火	かたろうえ	4
8月	3 土	ZUMBAを楽しもう	3
	20 火	好きな歌を紹介しよう	5
	27 火	＜台風接近のため中止＞	—
9月	7 土	お金について考えよう①	3
	10 火	卓球を楽しもう①	5
	17 火	お月見団子を作ろう	5
10月	5 土	お金について考えよう②	1
	8 火	ハロウィングッズを作ろう	5
	15 火	卓球を楽しもう②	5
	22 火	ハロウィンクッキーを作ろう	5
11月	2 土	相談	1
	12 火	折り紙を使って②	4
	17 日	（大在公民館出前講座） 織り込み模様を作ろう	4
	19 火	好きな歌を紹介しよう④	5
12月	26 火	蒸しパンを作ろう	7
	14 土	造形活動（粘土）	4
	15 日	（西部公民館出前講座） クリスマスリースを作ろう	7
	17 火	茶道体験	6
1月	24 火	クリスマスリースを作ろう	6
	14 火	絵馬に願い事を書こう	5
	21 火	好きな歌を紹介しよう⑤	6
	28 火	身体を動かそう（卓球・体操・ストレッチ）	8
	29 水	さくらの杜高等支援学校出前講座 ZUMBA ドローン	31
2月	1 土	相談活動	0
	7 金	由布市支援者研修で講話・助言	27

通常講座 土曜日… 7回

火曜日… 21回

出前講座… 3回（公民館2回、高等支援学校1回）

支援者研修… 1回（由布市）

計33回



＜ 初めての茶道 自分で点てて振る舞います ＞



＜ 卓球 ダブルスを楽しめるようになりました ＞

④ 成果と課題

- 受講者たちはとても楽しみに毎週通ってきており、受講者数も少しずつ増加してきた。交通手段としては
②大分駅からバスや徒歩 ②自宅から家用車を運転
③保護者の送迎 である。
- 参加のきっかけは、これまで受講していた方やその保護者からの紹介、公的機関でチラシを見て、公民館出前講座でOUCを知り興味を持ったということである。口コミの大切さがわかる。
- 通常講座の内容は、創作・音楽・運動・料理とバランスが取れた構成である。受講者の「やってみたい」という声も取り入れ、実施した。講師は適切な声掛けや支援ができる方をお願いしている。
- 公民館出前講座も好評だった。「休みの日にこういう場があるとありがたい」という声があった。
- 「お金について考えよう」では、家計を管理することの重要性を伝え、家計簿アプリで支出を記入してみるという試みを行ったが、受講者は少なく、難しいようだった。方法や内容を工夫していく必要がある。

⑤ 今後の展望

特別支援学校との連携を強化し、在学中にOUCを知り体験してもらう機会をつくりたい。また、現在のスタッフ（基本2人）では受け入れ人数に限られるので、講師やボランティアを養成・確保していく必要がある。

(4)「かたろうえ大分」及び動画教材

① ウェブサイト開設の目的

令和4年度に実施したアンケート結果から、障がいのある方の生涯学習に関する情報が十分に集約されていないことや、当事者や保護者、支援者は「身近に生涯学習情報がない」と感じていることが分かった。この状況を踏まえ、県内の生涯学習に関する情報を一元化するウェブサイトを開設することで、より充実した学習機会の提供を目指した。

② 掲載内容

イベント一覧	県内の、障がい者が参加できるイベントやプログラム情報。ジャンル（スポーツ・健康、アート・音楽等）や地域で自分に合ったイベントが検索可能。
団体一覧	県内の団体の一覧。ジャンルで自分に合った団体を手軽に検索可能。活動内容や問合せ先の他、活動方針等を「ひとことメッセージ」として紹介。
国や県内の取組	文部科学省の取組情報、大分県の取組情報、行政職員向けの研修情報等を掲載。
その他	学習動画、リンク集

*「学びの場」を探している方向けの情報と、行政職員向けの情報を掲載している。

③ 情報収集・広報の工夫

- ・情報提供フォーム（様式）を作成し、市町村の生涯学習所管課や障がい福祉所管課、連携団体に情報提供依頼。
- ・サイト内にも問合せフォームを作成し、団体から個別の問い合わせが可能になった。
- ・大分県HPのトップページに「かたろうえ大分」の情報を掲載（下図）



④ ウェブサイト運用上の工夫

ア. 見やすく探しやすいトップページ



イ. アクセシビリティへの配慮

「情報保障」の観点から、読み上げ・ルビ振り機能、文字サイズ変更機能、背景色変更機能を設けている。さらに、行政用語など難しい言葉を使わずに、「やさしい日本語」を使用するようにしている。

⑤ 動画教材制作

冒頭のアンケート調査で明らかになった「自宅での学習」「インターネットを使つての学習」のニーズの高さに対応するために、学習動画を2種類、各3本制作した。内容は、視聴者が興味を持てるもので、かつ生活を豊かにする「食」と「写真の撮り方」にした。

⑥ 成果と課題、今後の展望

更新はこまめに行っており（令和6年度は117回）、閲覧者数も月平均690人と開設当時より増加している。また、実際に「かたろうえ大分」で見つけた人の参加があったとイベント主催者から報告もあるなど、障がいがある方と学びの場をつなぐ効果は現れ始めている。一方、まだ認知度は高くないので、より一層内容の充実と周知に力を入れたい。

(5)「共に学び、生きる共生社会コンファレンス～おおいたでかたろうえ！～」

① コンファレンス（実践交流会）の目的

障がい者の生涯学習活動の関係者が集い、学びの場づくりに関する好事例の共有や障がい者の生涯学習活動に関する研究協議等を行うことで、障がい理解の促進や、参加者同士の学び合いによる支援者の育成、障がい者の学びの場の充実を目指す。

「かたろうえ」というのは、「語ろうよ」と、大分弁の「一緒にやろうよ」「仲間に入ろうよ」いう意を掛けている。

② 令和4年度コンファレンス

日時：令和5年2月4日(土)

場所：別府市市民会館

参加者：137名（会場73名、オンライン64名）

内容：

<開会行事> オープニングアトラクション
「ヨカたの」による演奏

<施策説明> 文部科学省及び大分県の実践発表

<実践発表>

テーマ①「青少年教育施設での学び」

テーマ②「公民館におけるプログラムの開発」

テーマ③「ボランティア・支援者の養成」

<基調講演>

「知的障害のある人の生涯学習の在り方～大分県の取り組みから～」

大分大学教育学部教授 衛藤 裕司氏

<シンポジウム>

「学校卒業後の学びの輪を広げるために」

【成果と課題】

○大分県の実践や先進事例を全国に発信するという点で効果的だった。

○県外の先進地（愛知県春日井市、兵庫県朝来市）のマインドを学ぶことができた。

○「ヨカたの」の演奏が素晴らしかった。障がいがある方の学びの成果発表の場という意義も大きい。

○講演は、県内の様々な取組の意義や成果をわかりやすく評価するものだった。

○チラシとポスターに障がい者アートを取り入れ、会場でもアート展示を実施した。

●もっと多くの特別支援教育の関係者（教職員や大学教員等）が来るとよい（広報のてこ入れ）。



< シンポジウムの様子 >

③ 令和5年度コンファレンス

日時：令和6年1月21日(日)

場所：コンパルホール 文化ホール（大分市）

参加者：106名（会場74名、オンライン32名）

内容：

<開会行事> オープニングアトラクション

「レッツダンスでガッツ元気の会」による
パフォーマンス披露

<施策説明> 文部科学省及び大分県の実践発表

<講演> 「障がいのある人の『第3の学びの扉』を開く
ーライフワイドの生涯学習」

鳥取短期大学幼児教育保育学科

教授 國本 真吾 氏

<実践発表>

①「大分市社会教育委員会の取組～令和2・3年度の研究から実践へ～」

②「地域につなぐ ～共に前へ、「共生コース」の取組～」

③「誰もが楽しく学べる機会の創出～ゆふぽきらきら教室の取組～」

<シンポジウム>

「社会人のためのサードプレイスづくりに必要なこと」

【成果と課題】

○「レッツダンスでガッツ元気の会」による生き生きとした演技が素晴らしかった。

○國本教授の講演は、障がいがある方にとって卒業後に学び続ける意義や必要性について、具体的事例を挙げながら分かりやすく説くものであり、この事業の重要性を確認できた。

●もっと多くの特別支援教育の関係者（教職員や大学教員等）が来られるよう、平日や土曜日開催を検討するとよい。

●参加者同士の交流の場や障がいがある方が関わる場面を増やすべきである。



< レッツダンスでガッツ元気の会によるダンス >

④ 令和6年度コンファレンス

日時：令和7年1月25日(土)

場所：由布市庄内公民館

参加者：78名（会場58名、オンライン20名）

内容：

<開会行事> オープニングアトラクション
白杵風車おんがく倶楽部（歌と演奏）

<施策説明> 文部科学省及び大分県取組

<実践発表>

①モデル公民館の取組

「中津市生涯を通じた障がい者の学び支援事業『まなびば』の取り組み」

山本 健吾 氏（中津市生涯学習センターまなびん館センター長）

②大分大学生涯学習講座の取組

「障がい者の学ぶ大学公開講座の目指すものとは」

岡田 正彦 氏（大分大学教育マネジメント機構基盤教育センター教授）

③おおいたユニバーサルカレッジの取組

「居場所づくりと学びのための第一歩」

松尾 卓也 氏（ヨカたの 代表）

山村明日香さん（OUC受講者）

<座談会>

「学びを届けるために必要なこと」

<ファシリテーター>

高橋 徹弥 氏（大分大学教職大学院 准教授）

<登壇者>

・ 荘司 壽子 氏（社会福祉法人共生荘 障がい者サポートセンター三角ベース 理事長）

・ 橋本 好美 氏（ヨカたの支援スタッフ／オンたの代表）

・ 大渡 克教 氏（大分大学教育学部附属特別支援学校PTA会長）

<講評>

堤 英俊 氏（都留文科大学教養学部学校教育学科教授 文部科学省アドバイザー）

【成果と課題】

○3年間の事業実施状況と取組拡充の推移についてお伝えすることができた。

○アンケート結果は概ね好評であった（下表）。



○アンケートの記述でも「このような素晴らしい取組を継続し、もっと広げてほしい」という意見が多く見られた。

○OUC受講者の山村明日香さんが登壇し、思いを話してくれたことで、「障がいがある方の主体的参加」が実現できた。彼女と「ヨカたの」松尾代表の掛け合いを見て、心の通い合う素晴らしい活動をしていることを感じた参加者が多かった。

○アートに加えモデル公民館での活動写真を初めて展示し、視覚的に取組を伝えた。



< 実践発表「OUCは楽しい！」と話す山村さん >

●3時間で行うにはプログラムを詰め込みすぎた。もっと余裕のある時間配分が必要だった。

●庄内地域の住民や公民館関係者へのメッセージ等、庄内公民館で行う意義が伝わるようにするべきだ。

●参加者同士が交流する場面がまだまだ少ない。

⑤ 今後の展望

コンファレンスは1年の集大成の場かつ関係者交流の場という大きな意義があることを認識し、もっと多くの方に参加・交流してもらえる場へと発展させていく必要がある。



< 会場ロビーでのアート・写真展示 >